

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第580号 平成25年7月22日

### 教育の力

7月12日、国連本部でパキスタンの少女が演説を行いました。この少女の名は、マララ・ユスフザイさん、16歳です。



【毎日新聞から転載しました。】

彼女は、女子教育の必要性を訴え活動を続けていましたが、昨年10月イスラム武装勢力「パキスタン・タリバン運動」に頭を撃たれ重傷を負いますが、イギリスで手術を受け奇跡的に回復した事は、皆さんもご承知の事と思います。

この日はマララさんの誕生日で、国連は「マララ・デー」と命名し、世界80カ国以上から約500人の若者達を招待し、共にマララさんの回復と誕生日を祝福しました（7月13日付朝日新聞から）。

マララさんは、「この日は私個人の日ではない。権利を訴える全ての女性や子ども達の日だ」と述べると共に、「テロリストは銃弾で私達を黙らせられると考えたが、私達は止められない」と如何なる暴力にも屈しない強い意志を示しています。

#### 【マララさんの演説要旨】

女性や子ども達のために、教育を受ける権利を訴えたい。

テロリストは私と友人を銃弾で黙らせようとしたが、私達は止められない。私の志や希望、夢はなににも変わらない。私は誰にも敵対はしない。私は誰も恨んでいない。

過激派は本やペンを怖がる。教育の力、女性の声の力を恐れる。世界の多くの地域で、テロリズムや戦争が子どもの教育の機会を妨げている。

全ての政府に無償の義務教育を求める。世界中の姉妹たち、勇敢になって。知識という武器で力をつけよう。連帯することで自らを守ろう。本とペンを手に取るう。それが一番強い武器。一人の子ども、先生、そして本とペンが世界を変えるのだ。教育こそがすべてを解決する。

（7月13日付朝日新聞からまとめました。）

私は、マララさんが 国連本部で演説する様子をテレビで見ましたが、その落ち着いた様子としっかりとした語り口は、とても16歳になったばかりの少女とは思えませんでした。

マララさんは、殺されるかも知れないという恐怖を味わった筈なのに、テロに対する怯えは感じさせません。

彼女の何処にそれ程の強さが宿っているのでしょうか。襲撃され、瀕死の重傷を負ったという自身の体験が、彼女をそこまで強くさせているのかも知れません。ただ、はっきりと感じられる事は、彼女にとって教育を受けたい

という欲求は、命と引き換えにする程の価値あるものだという事です。

私はこれまで、教育を受けるという事に関して、それ程の強い意志を持ったことはありません。それは多分、我が国では、経済上の問題や学力上の制約があるとはいえ、誰でも意志があれば学校で学ぶ事がごく当たり前になっていて、その事に馴らされてしまっているせいだと思います。

日本の子ども達は、生まれた時から、様々な学びの環境が整えられています。しかし、マララさん達は、学ぶ事それ自体を世の因習と闘って勝ち取らなければならないのです。

「命がけで学ぶ」等という思いは、ついぞ持った事はありませんが、考えて見ると、そもそも命がけで何事かをやろうという事自体が殆どない様に感じています。マララさんからは「日本は平和ボケ」しているといわれそうですが、同時に私達は、日本に生まれた事を感謝すべなのだと思います。

もう一つ、彼女の演説を通して強く感じたのは、徹底した非暴力主義です。民主主義や自由、更には正義の名の下に、今も地球上の様々な所で多くの血が流されています。マララさんも、暴力の被害者ですが、彼女は、自分を襲った過激派を恨んでいないといいます。彼女は、誰とも敵対せず、誰をも憎まず、そして、タリバンや全ての過激派の子ども達に教育を受けさせたいと訴えています。

全ての子ども達が自由に学校に通い、学ぶ事が出来る様になれば、確実に世界は変わると私も思います。しかし残念ながら、世界中には教育を妨害する暴力がいまだに渦巻いています。

学校に通う子ども達の命が奪われるという暴力事件は後を絶ちませんが、それでも、教育を受けたいという子ども達の欲求を押さえつける事は不可能でしょう。その事をマララさんははっきりと見せつけています。

マララさんは「知識という武器で力をつけよう」「本とペンを手に取ろう。それが一番の武器だ」といっています。それは、自分達の権利は、闘う事によってでしか手に入らないという現実を直視しているからだと思います。そして、その現実を変える力が教育にはあるのだという事を、彼女は確信を持って我々に伝えようとしているのではないのでしょうか。(塾頭：吉田 洋一)